



旧竹中家茶室 蓑庵写し三畳

数寄屋師の創意

— 笛吹嘉一郎と旧竹中邸茶室

竹中大工道具館新館建設工事のそばでもう一つの興味深い工事が進められていた。旧竹中邸茶室の修理工事である。

同茶室は昭和33年（1958）、七畳と三畳を新築し、同41年に仏間を増築したものである。設計施工を手がけたのは、数寄屋の名工・^{うすい}笛吹嘉一郎（1898～1969）。戦前に大河内山荘や小林一三の茶室など著名人の仕事を、戦後は表千家出入りとして東京出張所や京都不審菴増築を手がけたことで知られる。手仕事のみならず、図面も引き、茶道や作陶にまでも通じていた非凡な棟梁で、自ら「数寄屋師」と称していた。

嘉一郎の作風は正統派で、奇をてらわず落ち着いたものである。そのため面白みがない、とも言われるが、作品をよく見ると、様々な創意工夫の跡を読み取ることができる。

茶室はしばしば名作の「写し」でつくられるが、嘉

一郎はこの写しの名人であった。この茶室も表千家不審菴の^{そったくさい}啐啄斎好み七畳、大徳寺玉林院の^{じょしんさい}如心斎好み三畳（^{さあん}蓑庵）の写しである。

写しは簡単そうに見えて難しい。名作を寸分違わぬよう造ろうとしても、敷地や材料等の条件から、同じものはできない。本歌の良さを残しながら、どう現実に対応するか。そこに数寄屋師の深い知識と経験に支えられた知的創造が求められる。

例えば蓑庵写し三畳の場合、下地窓と連子窓の位置が入替わり、床柱は赤松皮付から絞丸太へ、給仕口と茶道口間の半柱は取り払われている。室内を明るく、シンプルにしたいという考えであろう。目立たないが、要点を押さえたこの工夫によって、独自性をもった茶室に生まれ変わっている。

写しという仕事が単なる本歌の模倣ではなく、創作の一形態であること、またそれをさり気なくこなす棟梁がいたことが学べる作品である。

【茶室特別公開のお知らせ】

新館オープンを記念して、10月4日（土）、5日（日）に茶室の特別公開を行います。多人数の来場が予想されるため、外部からのみの見学となります。詳しくは追って当館HPにてお知らせいたします。